

| | |
|---------|---|
| 氏名(本籍) | 魯 ^の 惠 ^へ 卿 ^{きよん} (韓国) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 博乙第2440号 |
| 学位授与年月日 | 平成21年4月30日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | 泉鏡花小説の生成 |

| | | | |
|----|---------|--------|-------|
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 新保邦寛 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 芳賀紀雄 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 松本肇 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士(学術) | 秋山佳奈子 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士(文学) | 近本謙介 |

論文の内容の要旨

本論文は、主に慶応義塾図書館が所蔵する泉鏡花小説の自筆原稿のうち、文壇登場以前の作品の、尾崎紅葉が添削を行った原稿を考察の対象とし、それらの詳細な分析を通して、鏡花文学の本質が矯められていく様態を描き出すことを目差すものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序論 本論文の目的と構成

第一章「蛇くひ」論——「両頭蛇」から「蛇くひ」へ——

第二章「黒壁」論——見る「予」と夜行する女——

第三章「聾の一心」論——「予」の変容をめぐる——

第四章「義血侠血」論——鏡花の人物造型の方法——

第五章「お弁当三人前」論——紅葉の添削による構想の変化を中心に——

第六章「取舵」論——人物中心の物語への変容——

第七章 一人称による語りの可能性——「黒壁」「聾の一心」を中心に——

結論 作家出発期の鏡花

序論では、〈観念小説〉の書き手として文壇に登場した事態に窺えるように、初めリアリズム作家だった泉鏡花が、その後浪漫的作風に転ずるといった通説に囚われている研究の現況を踏まえつつ、そうした研究が、尾崎紅葉の添削を経ているという初期作品の実態を無視したものであることを批判し、その添削の跡が残る十作品の原稿の詳細な検討の重要性を説いている。そして句読点レベルから文単位までの九つの観点を用意し、その観点からの検討が提示されている。

第一章で取り上げた「蛇くひ」は、乞食集団「唐」の奇矯な風俗や行動を描く小説だが、鏡花の原稿では、不吉な前兆を意味する「両頭蛇」と題されていた点が示唆するように、この集団の目撃者が重視されていて、その後の展開も用意されていた節がある。紅葉は、その目撃者の体験レベルの描写を削り、「唐」中心の物語に整えていくことで、纏まりのよい近代短編小説に仕上げ、それに伴って題名も「蛇くひ」という彼らの

奇行を象徴するものに変えた、と論じている。

第二章で取り上げた「黒壁」は、〈予〉が怪談会の席上で、〈丑の時詣〉を行う陰惨な女の姿を語る写実的作品だが、本来は、〈予〉の体験を主とした長い構想のものであった。残された原稿を見ても、〈予〉がうちに本物の化物と遭遇する場面が用意されていたことが窺え、女にも妖艶な魔女の性格が付与されているなど、総じて後の「高野聖」を思わせるロマネスクな作品なのだが、紅葉はそうしたすべてを削除してしまった、という次第を論じている。

第三章で取り上げた「聾の一心」は、亡き父〈清次〉をモデルにした作品であり、死を前に亀の細工の完成を急ぐ職人の一心と、それを見守る娘の阿駒とその弟の様子、語り手たる医師の〈予〉によって報告されていくことになる。ところが、その一方で〈予〉と阿駒の恋が描かれ、一心の臨終を描く結末では、〈鏡花〉なるもう一人の語り手が登場し、二人の恋の行方を問い掛けるという趣向まで用意されていた。こうした重層的な語りは後の鏡花文学に通じるものなのだが、紅葉は、一心の職人としての執念のみ強調し、他はすべて削ぎ落としてしまったと述べている。

第四章では、「義血侠血」を取り上げているが、その原稿「替判事」に残された紅葉の添削が限られているため、主に初出形との比較によって論じている。すなわち義侠心から不遇な男の学資の援助を買って出た女芸人が、金を奪われたために強盗殺人を働き、その援助した男に裁かれるという大筋に変わりはないが、「替判事」の方は、一途な性格の女が凄絶な殺人者に変貌する様を描き、それに対し〈語り手〉が森田思軒ばりの〈社会の罪〉なる断案を下すという〈観念小説〉の走りの如き作品である。ところが、「義血狭血」になると、鉄火肌故に悲劇的事件に巻き込まれ、揚句に女の弱さを痛感させられるという、正に紅葉好みの性格悲劇に変わっていく、という次第である。

第五章で取り上げた「お弁当三人前」の場合、その原稿前半に紅葉の添削の跡が見られる。それは、叔母によって亡き実母の存在を知った少年が、その倂を求めて旅するという部分だが、その思い込みの激しい叔母の名が鏡花の母の名であったり、鏡花の帰省時の見聞が取り込まれたり、さらには〈鏡花〉なる章題が付されたりと、鏡花の亡き母への思慕を描いた最初の作品たる評価にふさわしい内実を備えたものだった。ところが紅葉がそうした体験を匂わせる点をすべて削ぎ取ってしまったため、亡母思慕の思いが求心力を失い、相対的に子供らの交流という後半の比重が重くなった、と論じている。

第六章で取り上げた「取舵」は、嵐の中を航行する船が難破しかけた時、乗り合わせた盲目の老人がかつての名船頭と分り、救われるという話だが、鏡花の旅行体験に基づいているだけに、実録風な細部の書き込みの多い作品である。こうした原稿の始めの三分の一程に紅葉の手が入っていて、それをみると、この盲目の老人が〈不幸なる〉という設定から〈厄介〉者に変えられているばかりか、その外面描写を削り内面描写を書き加えていることが分る。鏡花はこうした紅葉の方針に従って、その後の部分の推敲を行ったようで、実録風の記述や語り手の説明などを削除し、要するに〈厄介〉者が救世主に反転するアイロニカルな近代短編小説に仕上げた、と述べている。

第七章では、再度「黒壁」と「聾の一心」に焦点を当て、鏡花が一人称小説を書いた意味を問い直している。すなわち、後の鏡花小説の特徴とされる〈自己投影〉的一人称の語り手が、これらの小説の原稿のものでもあったところから、一人称小説に初めから備わっていたと考えられ、さらに「聾の一心」に見られる自伝性への傾斜がこうした語り手の成立を促したのであり、その語り手が鏡花の三人称小説たる〈観念小説〉の義務の権化の如き主人公とは逆に人情家なのも故無しとしないこと、およびそうした性格が、虚構性の強い「黒壁」でも変わりなかったのは、怪異譚を語るにふさわしいものだったからで、それ故以降の怪異小説でも踏襲されていくことが主張されている。

結論では、以上の検討から、紅葉がもっぱら近代リアリズム小説の観点から添削を行ったことを言明する一方、原稿においても次のような鏡花の特質を見出している。すなわち、身近な素材を繰り返すばかり

か、それらを幾重にも重ねる形で筋を創出し、時にはそこに筋を逸脱したイメージまで焼き重ねるといった特質だが、それが後の小説のものでもあることから、鏡花独自の方法が成立していると思ふべきで、それは彼が好んだ童謡から自然に体得した方法である、と主張している。

審査の結果の要旨

泉鏡花の初期小説の多くが、師の尾崎紅葉の添削を経たものであり、しかもその添削の跡を留めた原稿が、慶応義塾図書館に所蔵されていることは、遍く知られている。そうした自筆原稿の検討によって明治20年代の鏡花文学、あるいは出発期の鏡花への理解が変わるであろうことは疑うべくもなく、著者も言うように、「義血侠血」の原稿が翻刻された後に発表された多くの論文を見ればその実際は明らかである。それにも拘らずその原稿全体の研究が進展しないのは、判読に極めて困難が伴うからであるが、著者は、紅葉の手が入った初期作品の原稿をすべて閲覧の上、判読している。先ず以てその努力を多としたい。

本論文は、その上で、自筆原稿がいかなる文学世界を描き出し、紅葉の添削によってそれがどのように変容したのかを、丹念な検討を重ねつつ論じた労作であり、その成果は、目覚しいものがある。先ず、先行研究の犯した数々の誤謬が改められた点が指摘できる。例えば「取舵」論において、〈糸魚丸〉なる船名を〈観音丸〉に変えたのが紅葉と知らない論者が、鏡花の観音信仰の現われと解釈してしまっている場合であるが、鏡花の体験に基づく〈糸魚丸〉に対し〈観音丸〉は当時のありふれた船名であることから、紅葉がリアリズムに則って改変したものと訂正している。あるいは次のような事例もある。後の鏡花小説の特徴である〈自己投影〉的一人称の語り手の設定だが、既に「黒壁」や「聾の一心」の原稿にも見出せるため、その事実を言い立てることをもって、そうした独自の語り手が徐々に生成されるとする先行論の誤認を正しており、この指摘は学界の注目を惹くところともなっている。次に、上記のように自筆原稿に鏡花の鋭い方法意識を認める点だが、他に、身近な素材を繰り返し使うことや、そうした素材なり全く異質な心象なりを幾重にも重ねつつ作品を構成していくことなどの鏡花独自の方法が、自筆原稿の文学世界で既に成立しているとの指摘もなされている。要するに、泉鏡花は初めから浪漫的作風の作家であり、写実的なのはあくまで紅葉の手を経て活字化されたテキストの話という次第で、従来の文学史的常識が大きく塗り替えられたことは改めて言うまでもない。

とはいえ、瑕瑾がない訳ではない。明治20年代の文学の場合、その近代性のみを問う訳にはいかない。伝統文学の拘束力をどこまで認めるかという問題が付きまとう。例えば鏡花独自の語りの問題にしても、日本には豊かな語りの伝統があり、それを鏡花がどの程度意識していたか。また構成方法についても、歌舞伎などの影響はないのか、さらなる検討が必要である。しかしそれらは、むしろ今後の課題というべきで、本論文の価値をいささかも損ねるものではない。本論文は手堅い研究であるだけに、その成果は揺ぎ無く、学界に与える影響は計り知れないものがある。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。